



高戸小浜海岸

高萩市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接な繋がりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県高萩市です。高萩支店長が高萩市長大部勝規氏にお話を伺いました。

高萩市は「筑波経済月報」第7号(2014年2月)第7回本コーナーにて紹介させていただきました。改めまして、本市の魅力や特徴、展望についてお聞かせください。

■多賀郡の中心地として発展

高萩市は澄み渡る海と青々とした山に囲まれた自然溢れるまちとして、古くから人々の生活が営まれてきました。

江戸時代には、現在の秋田県仙北市角館町から移された戸沢氏が松岡城を築き、その後、水戸藩の附家老中山氏の城下町として明治維新を迎えました。

明治以降は、市内に郡役所や税務署、営林署、警察署などが設置され、多賀郡の中心地として繁栄してきました。

その後、1897年(明治30年)の常磐線開通を機に、木材や馬の産地としてだけでなく、新たに石炭産業のまちとして発展していきま

また、江戸時代中期には、長久保赤水が我が国

の地図学上に不朽の業績を残したほか、幕末の世に松岡の城下町で生まれ育ち、後の植物学の主導的役割を果たした松村任三^{じんぞう}を輩出するなど、本市には数多くの偉人の功績が残っています。

■将来を担う子どもたちに誇れるまちを残す

しかし、現在、本市が置かれている状況は、急速に進む少子高齢化や若者の流出などによる人口減少に加え、厳しい財政状況などを背景に、これまでとは大きく変化しています。

私はこの状況を改善したい、そして、将来を担う子どもたちが誇れるまちを創造したいという信条を胸に、「市民主役、市民目線の市政」を公約に掲げ、2018年(平成30年)の市長選挙に立候補し、初当選いたしました。

市長に就任した同年3月からは、次世代への負担軽減を見据え、全ての事業が最小の経費で最大の効果を発揮できるようにするため、様々な角度から再検討を重ねていきました。

そして、事業の重要性や緊急性、財源確保など

の観点から、「道の駅」整備計画をはじめ、税金が多く投入される高萩駅前商業施設への宿泊施設誘致計画など大型事業について、公約通り廃止としました。

■「ハコモノ」より、市民の小さな「声」

市長就任後、私はすぐに「市長室開放事業」に着手しました。これは、「市民の小さな声こそ、まちを良い方向へ導く素晴らしいヒントになる」と考えているためです。開放日は議会が無い月に1日、毎回3組の市民をお招きしています。

市民のみなさんが日々感じている悩みや疑問、改善案などを聞き、そして、自らの足でまちを歩くことで、本当に必要なまちの姿が浮き上がってきています。

私は、市民の熱心な考え方の一つひとつがまちづくりの起爆剤となり、行政がそれらを具現化していくことで、「市民主役の市政」の実現につながっていくと確信しています。



若者と対話する大部市長（右）

また、市民の想いを実現することで、子どもたちをはじめ、高萩市にUターンしたいと考えている若者、そして、首都圏に住む方などの心の中に、「高萩に住みたい、高萩で働きたい」という気持ちが沸き上がっていくことを期待しています。

■官民が連携した教育環境の充実

人口減少の時代が進む中、私は次世代の子どもたちをまち全体で育てることができる環境を整えていくことが重要であると考えています。

その1つに、長年市民に愛されてきた民間のスイミングスクールとの水泳の授業に関する連携



高萩市長 大部 勝規氏



高萩支店長 古橋 剛

事業構想があります。この事業を実施することで、子どもたちは水泳指導のプロから安全に楽しく水泳が学べ、教師は学習指導に集中でき、スイミングスクールは施設の老朽化を防ぐとともに、安定した収入と社会貢献ができる、という「三方よし」を実現できると考えています。

■広域連携によるごみ処理施設の整備に向けて

2017年9月、東日本大震災からの復興のシンボルでもある本庁舎の再建工事が完了しました。今後は、市民生活をより豊かに、より安定したものにするため、可燃ごみ中間処理施設の整備事業に力を入れていきたいと考えています。

この整備計画は、2018年4月、隣接する北茨城市長からの一本の電話から始まりました。北茨城市の清掃センターは、稼動から40年が経ち、老朽化が課題となっていました。

また、本市は長年、ごみの処理を民間業者に依頼しています。今後も委託を続ければ、委託先の施設の老朽化や処理費用の高騰などの変化による影響を受ける可能性があります。

私は、各種ライフラインの維持、そして充実、文化的で最低限度の市民生活を保障するために怠ってはならない行政の役目だと考えています。

先日、友好都市である埼玉県飯能市の先進的なクリーンセンターを視察した際、有害物質などの排除だけでなく、環境教育やまちづくりという観点からも、非常に有効であると感じました。

一方、整備には多額の費用が必要になります。両市で様々な検討を重ねた結果、環境省の循環型社会形成推進交付金と復興庁の震災復興特別交付税措置により、最大で整備費用の97.5%を国が負担する形で実現できることが分かりました。

さらに、建設予定地は、茨城県から北茨城市中郷町にある広さ約5haの県有地を低価格で購入できることになりました。私たちの想いと国の補助金や県からの支援がぴったりと重なった時、私は足が震える想いでした。

住民説明会などでは、市民から環境に対する不安など厳しい意見も上がりました。しかし、私は、これまで懸案だった課題に対して、行政として「未来への責任を果たすことができる絶好の機会である」と捉えています。

また、本市がごみ処理施設を有することで、10年、20年先の市民生活に、安心と安定を提供できるだけでなく、委託による長距離輸送を避けることで地球環境にも配慮でき、さらに次世代に良好な生活環境を残すことにもつながるのです。



飯能市のクリーンセンター視察の様子

■日本地図の先駆者・赤水を世界へ発信

本市が生んだ偉人の1人、長久保赤水は、伊能忠敬を日本地図の“完成者”とすれば、赤水は日本地図の“先駆者”と呼ばれ、日本の地理学者として近世史に不滅の足跡を残しました。

赤水は日本で初めて、緯度を表す緯線と方位を示す方角線を使った日本地図を完成させました。赤水の日本地図は、完成から約100年間に8版を数えるベストセラーとなっています。

本市は、今年7月に都内で開催が予定されている国際地図学会議に出席する学者向けに、赤水ゆかりの地をたどるバスツアーを企画しています。

このような事業を通して、本市がこれまで歩んできた長い歴史や先人たちの偉業の風化を防ぎ、若い世代への伝承をはじめ、国内外にも積極的に発信したいと考えています。



「改正日本奥地路程全図」1779年(安永8年)初版発行
長久保赤水顕彰会所有

■スポーツを通じた心の交流

今年10月、本市は「いきいき茨城ゆめ国体」のウェイトリフティング競技と軟式野球競技の会場になっています。リハーサルでは市民のおもてなしが非常に好評で、多くの方々に喜んでいただきました。本番も大変期待しています。

また、今後は、子どもたちが普段から活発に運動できる総合グラウンドの整備なども検討し、交流人口の増加を図っていきたいと考えています。

■市民が「幸せ」を感じられるまちづくりを

今後、本市は社会保障や公共施設の老朽化対策、住宅公社改革推進債の償還などの経費に加え、一般財源の減少も見込まれ、厳しい財政状況が続くと考えられます。

しかし、行政と市民、企業、さらには国や県、周辺市町村と協力、連携しながら施策を効率的に展開することで無駄を省き、市民が「高萩に住んで良かった。今の自分は幸せ。」と感じられるまちづくりを進めていきたいと考えています。

■筑波銀行に期待すること

筑波銀行は本市の市政を深くご理解いただき、「困った時にすぐに返事が戻ってくる地域の銀行」として、大変心強く感じています。

今後、様々な施策やイベントなどの開催には、資金面だけでなく、筑波銀行が持つネットワークを活用して、本市をサポートしていただければ幸いです。

取材日：2019年2月18日

写真提供：高萩市